



## 教材「大蛇・小蛇」考（1）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学釧路校 公開日: 2010-01-04 キーワード: 作成者: 佐野, 比呂己 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00008388">https://doi.org/10.32150/00008388</a>

# 教材「大蛇・小蛇」考(1)

佐野 比呂己

北海道教育大学釧路校国語科教育研究室

## A Study on "OOHEBI KOHEBI" (1)

Department of Japanese Language Education, Kushiro Campus, Hokkaido University of Education

SANO, Hiromi

### 概要

本稿は、片山広子の随筆「大蛇・小蛇」について、教材として分析・考察を加えようとするものである。

「大蛇・小蛇」は、昭和三十年(一九五五)に発行された柳田国男監修高等学校用国語教科書に所収された教材である。まずは、柳田国男監修高等学校用国語教科書における位置について確認した。続いて、筆者である片山広子、原典である『燈火節』について、教科書頭注、及び教師用指導書を参照しつつ、人物像・作品像に迫った。さらに、「大蛇・小蛇」について、教科書の記述と原典の異同について、異同表を作成した。この異同表は随筆「大蛇・小蛇」の真意に迫る基礎資料となるものである。加えて、文章全体の大意・構成を記した。

### 一 教材「大蛇・小蛇」

片山広子の「大蛇・小蛇」(稿末【資料】参照)は、『国語 高等学校一年上(高等学校第一学年前期用)』(柳田国男監修 昭和三十年代(一九五五)版 東京書籍)(以下、「柳田監修国語教科書」と略す。)に所収されている教材である。この教科書の単元設定、教材選定にあたっては、監修者である柳田国男の考えがかなりの部分で反映されている<sup>1)</sup>。本稿では、「大蛇・小蛇」について、教材として分析・考察するとともに、柳田の教材選定意図もあわせて論じようとするものである。

「大蛇・小蛇」は、柳田監修国語教科書の「一 随筆・随想」に置かれた教

材である。この単元の教材配列は左の通りである。

- 一 浅春随筆（栃内吉彦）<sup>2</sup>
- 二 大蛇・小蛇（片山広子）
- 三 地図をいろどる（鏑木清方）
- 四 かみなりさま談義（東条操）
- 五 ろくをさばく（三淵忠彦）

この五編のうち、「浅春随筆」「大蛇・小蛇」「ろくをさばく」の三編については、教科書改訂後も引き続き、所収されている<sup>3</sup>。このことから、「浅春随筆」「ろくをさばく」と同様に、柳田の「大蛇・小蛇」に対する思い入れの強さをうかがい知ることができよう。

## 二 筆者・片山広子

「大蛇・小蛇」の筆者・片山広子について、柳田監修国語教科書には次のように記されている。

◇片山広子<sup>4</sup> 筆名松村みね子（一八七八）東京都の生まれ。翻訳家・歌人。東洋英和女学校卒業。著書に歌集『翡翠』<sup>5</sup>、翻訳『シング戯曲全集』などがある<sup>4</sup>。

歌集『翡翠』に「ひすい」とルビが打たれているが、「かわせみ」の誤りである。柳田監修国語教科書の教師用指導書には、「筆者」の項目において次のような記述が見られる。

片山広子（カタヤマ ヒロコ）筆名松村みね子。一八七八年（明治一一）二月、東京都港区麻布に吉田次郎の長女として生まれた。東洋英和女学校（東洋英和女学院の前身）を卒業、片山貞次郎に嫁した。早くから佐佐木信綱

に師事して和歌を学び、女流歌人として知られた。歌集に「翡翠」「野に住みて」などがある。またアイルランド文学に造詣が深く、松村みね子の筆名のもとに「シング戯曲全集」その他数種の翻訳集を出している。その訳文は正確暢達<sup>5</sup>であるのもって称された<sup>5</sup>。

片山広子は、イギリス総領事などをつとめた吉田次郎の長女として生まれる。明治二十九年（一八九六）東洋英和女学校卒業し、同年、佐佐木信綱の竹柏園に入門する。明治三十二年（二八九九）大蔵省に勤務していた片山貞次郎と結婚し、貞次郎との間に二人の子どもに恵まれる。大正五年（一九一七）第一歌集『翡翠』を竹柏会出版部より発行する。しかし、『翡翠』についてはそれほど評価を得られなかったようである。第二歌集『野に住みて』（第二書房）は、昭和二十九年（一九五四）に発行され、室生犀星、宮城二、日夏耿之介、川田順、久松潜一らから高い評価を受けている。一方、アイルランド文学については、松村みね子の筆名のもと、多数の翻訳の仕事を行なっている。広子の翻訳は正に「正確暢達」であり、外国語に堪能な森鷗外、上田敏、坪内逍遙、菊池寛らから高い評価を得ている。

『かなしき女王——ケルト幻想作品集』（ちくま文庫 平成十七年（二〇〇五））、『シング戯曲全集』（沖積社 平成十五年（二〇〇三））、『ダンセニイ戯曲集』（沖積社 平成三年（一九九二））は、平成二十年（二〇〇八）三月現在も入手可能である。現在においても鑑賞に耐えうるという点において、このことは、広子の翻訳の力を示す証拠となる事項である。

教科書頭注、指導書ともに触れていないが、広子は芥川龍之介の精神的な恋人「越し人」、堀辰雄の『聖家族』の細木夫人のモデルとしても知られる存在である。昭和三十二年（一九五七）三月、七十九歳のとき死去した<sup>6</sup>。

## 三 原典『燈火節』

### 1 「燈火節」とは

本文の原典について、教科書に次のような記述がある。

◇燈火節Ⅱ一九五三年 暮しの手帖社刊<sup>7</sup>。

また、教師用指導書の「筆者・原典」の項においては次のように記述されている。

この教材は、筆者が終戦後書きとどめた随筆集「燈火節」(一九五三年 暮しの手帖社刊)の中の「大へび小へび」の部分を探ったものである。

『燈火節』は暮しの手帖社から昭和二十八年(一九五三)に刊行され、昭和三十年(一九五五)には第三回日本エッセイストクラブ賞を受賞している。

前述の通り、広子は、アイルランド文学の翻訳家として、『翡翠』『野に住みて』の歌集を世に出した歌人として活躍しているが、随筆についてはこの『燈火節』一冊のみが世に残るだけである。

『燈火節』は、しばらく絶版で入手が困難であったが、平成十六年(二〇〇四)十一月、五十年の歳月を経て、月曜社から再刊された。これは、初版本の全四十八編を中核に、随筆と小説を網羅した集成本を出版し、平成十九年(二〇〇七)に発売している。さらに平成十九年(二〇〇七)十二月には、同じく月曜社から『新編燈火節』が新編として発行されている。旧字、旧かなをそのまま用い全四十八編を収載するとともに、「燈火節の周辺」と題して、大正から昭和初期に雑誌に発表された随筆八編を新規に加えている。

燈火節とは、「キャンドルマス *candlemas*」のことであり、毎年、二月二日に行なわれる祝祭のことである。聖燭祭とも称され、旧教カトリックでは、キリスト降誕後四十日目に、聖母マリアが産後の汚れの清めの式を受け、キリストを神殿にささげた日が二月二日であり、ミサの前に蠟燭の行列が行なわれることからこの名がつけられた。アイルランドでは古くからの習慣で、春を迎える聖女ブリジッドの祝祭の日とされる。ブリジッドは、蠟燭のみならず全ての火を守る守護神でもある。この日にブリジッドが生まれ、アイルランドではこの日から春が始

まるとされる。広子も、このブリジッドと同じ二月生まれである。広子がブリジッドに親近感を抱いていたことは容易に想像できるところである<sup>10</sup>。

## 2 「大へび小へび」

教材「大蛇・小蛇」は、原典『燈火節』では「大へび小へび<sup>11</sup>」というタイトルで所収されている。教材化するにあたって、タイトルは原典と比べて表記に関して若干の違いはあるものの、教科書にはほぼ全文が採録されている。

また、原典『燈火節』には四十七編の随筆が収載されているが、初出がわかっているものは、そのうちわずかに八編に過ぎない。ここで取り扱う「大へび小へび」の初出についてもわかっていない。原典『燈火節』への書き下ろしの可能性も否定できない。いずれにせよ、戦後間もないころに執筆されたと考えて間違いあるまい。

## 四 原典と教科書の異同

本文の原典は、旧字旧仮名が用いられている。それ以外に、大きな異同はないが、表記・表現に関して左記のような異同表を作成した。この異同表は、教科書の記述からだけでは理解しえない随筆「大蛇・小蛇」の真意に迫る基礎資料となるものである。

10										9		頁													
1	1	12	12	12	12	11	11	9	9	9	7	7	5	5	5	4	4	4	3	3	2	2	1	行	
すみか	類まで	大きい蛇・小さい蛇・中蛇・おろちの	いたるところ	少なく	野原	囲まれた	伝えたということである。	なつて後、再び	セント・パトリック	セント・パトリック	偉い	シャノン川	ようやく	また	食い荒し	道々	作りはじめる	逃げ道	一生懸命	聞いた	偉い	劫 <small>まじ</small>	はじめに	昔話	教科書
住家	類まで	大きい蛇・小さい蛇、中蛇、おろちの	至るところ	すくなく	野はら	かこまれた	伝へたといふ事である。	なつて後ふたたび	セント・パトリック	セント・パトリック	えらい	シャノン河	漸く	又	喰い荒し	みちみち	作り始める	逃げ路	一生けんめい	きいた	えらい	劫 <small>まじ</small>	初めに	昔ばなし	原典

15	14	14	13	12	11	11	11	10	10	9	8	8	7		6	6	5	4	4	4	3	3	2	2
奇稲田姫	素盞鳴尊 <small>すまのおみこと</small>	人間もふえて	フェアリー	みえる	大昔	門違い	セント・パトリック	セント・ジョージ	仲がよくない。	いつの間にか	移動していったらしく	だんだん	急いで		大いに怒って、「けしからん蛇のやつ。下がれ、下がれ。なんじのともがら、永久に消滅せよ。」としかりつけた。	食われて	だいじな弟子	食い殺してしまった。	たちまちおどりがあがつて	またいで	珍しくもない	ある山陰の狭い道を	休む暇なく	聖者がひとりの弟子とともに、いろいろな
稲田姫	素盞鳴の尊	人間も殖えて	妖精 <small>まじり</small>	見える	大むかし	門ちがい	セント・パトリック	セント・ジョージ	仲がよくない	いつの間にか	移動して行つたらしく	段々	いそいで		大いに怒って「けしからん蛇のやつ！ 退れ、退れ、汝のともがら、永久に消滅せよ」と叱りつけた。	喰はれて	大事な弟子	喰い殺してしまった。	忽ちおどりがあがつて	跨いで	めづらしくもない	或る山かげのせまい道を	休むひまなく	聖者は一人の弟子と共にいろいろな

												11											
12	11	10	10	10	9	8	7	6	5	5	4	4	4	4	2	2	1	1	1	16	16	16	15
<p>食われなかったやつらも</p>												<p>八岐のおろち</p>											15
<p>大蛇が出てきて大勢の敵を食い殺した。</p>												<p>そのおろち</p>											16
<p>田道の墓を掘り返した。</p>												<p>各八つあり</p>											16
<p>蝦夷が攻めこんできて</p>												<p>松やかしわがはえて、</p>											16
<p>しばらくたつて</p>												<p>からだ全体の長さが</p>											11
<p>広がく世間から惜しまれ、手厚く葬られた。</p>												<p>はいわたつた</p>											1
<p>石巻</p>												<p>そうとう</p>											1
<p>ひろく世間から惜しまれ、手厚く葬られた。</p>												<p>大きいものならば、奇稲田姫の家などにはいりこむことはできなかつたろう。それが伝説なのである。</p>											2
<p>大蛇が出てきて大勢の敵を食い殺した。</p>												<p>大物主神</p>											2
<p>喰はれなかった奴らも</p>												<p>ある時</p>											4
<p>大蛇が出てきて多勢の敵をくひ殺した。</p>												<p>大物主の神</p>											4
<p>大蛇が出てきて多勢の敵をくひ殺した。</p>												<p>或るとき</p>											4
<p>喰はれなかった奴らも</p>												<p>大物主の神</p>											4
<p>大蛇が出てきて多勢の敵をくひ殺した。</p>												<p>あげがた</p>											4
<p>喰はれなかった奴らも</p>												<p>櫛ばこを開けてみると、</p>											4
<p>大蛇が出てきて多勢の敵をくひ殺した。</p>												<p>蛇がゐたといふ、これは</p>											5
<p>大蛇が出てきて多勢の敵をくひ殺した。</p>												<p>人間の娘と神との間の</p>											5
<p>大蛇が出てきて多勢の敵をくひ殺した。</p>												<p>蝦夷らがそむいた時、</p>											6
<p>大蛇が出てきて多勢の敵をくひ殺した。</p>												<p>石巻</p>											7
<p>大蛇が出てきて多勢の敵をくひ殺した。</p>												<p>ひろく世間から惜しまれ手厚く葬られた。</p>											7
<p>大蛇が出てきて多勢の敵をくひ殺した。</p>												<p>しばらく経つて</p>											7
<p>大蛇が出てきて多勢の敵をくひ殺した。</p>												<p>蝦夷が攻め込んで来て</p>											8
<p>大蛇が出てきて多勢の敵をくひ殺した。</p>												<p>田道の墓を掘りかへした。</p>											8
<p>大蛇が出てきて多勢の敵をくひ殺した。</p>												<p>大蛇が出てきて多勢の敵をくひ殺した。</p>											9
<p>大蛇が出てきて多勢の敵をくひ殺した。</p>												<p>大蛇が出てきて多勢の敵をくひ殺した。</p>											10
<p>大蛇が出てきて多勢の敵をくひ殺した。</p>												<p>大蛇が出てきて多勢の敵をくひ殺した。</p>											10
<p>大蛇が出てきて多勢の敵をくひ殺した。</p>												<p>大蛇が出てきて多勢の敵をくひ殺した。</p>											11
<p>大蛇が出てきて多勢の敵をくひ殺した。</p>												<p>大蛇が出てきて多勢の敵をくひ殺した。</p>											12

												12												
12	11	9	8	8	7	7	7	6	5	5	4	4	3	3	2	2	2	2	15	15	14	14	13	12
<p>まだ若い北条時政が</p>												<p>石巻の町にはいる</p>											12	
<p>怪しいうり</p>												<p>たちまちに二本のくぬぎを生ひ、</p>											13	
<p>まだ若い北条時政が</p>												<p>道をはさみて</p>											14	
<p>まだ若い北条時政が</p>												<p>三年めのことであつたが、</p>											14	
<p>まだ若い北条時政が</p>												<p>娘を尋ねて、</p>											15	
<p>まだ若い北条時政が</p>												<p>石巻</p>											15	
<p>まだ若い北条時政が</p>												<p>人間がだんだんふえて</p>											2	
<p>まだ若い北条時政が</p>												<p>にぎやかになると</p>											2	
<p>まだ若い北条時政が</p>												<p>歴史の表に</p>											2	
<p>まだ若い北条時政が</p>												<p>藤原道長</p>											2	
<p>まだ若い北条時政が</p>												<p>ごきげん伺いとして</p>											3	
<p>まだ若い北条時政が</p>												<p>うりをささげてきた。</p>											3	
<p>まだ若い北条時政が</p>												<p>夏の夕方、道長は、「ほう、うまさうなうりだな。」</p>											4	
<p>まだ若い北条時政が</p>												<p>進物のかごを</p>											4	
<p>まだ若い北条時政が</p>												<p>その時御前に</p>											5	
<p>まだ若い北条時政が</p>												<p>まゆをひそめて、「殿、</p>											5	
<p>まだ若い北条時政が</p>												<p>このかごのうりが</p>											6	
<p>まだ若い北条時政が</p>												<p>目に見るやうに</p>											7	
<p>まだ若い北条時政が</p>												<p>うりをまっ二つに切つた。</p>											7	
<p>まだ若い北条時政が</p>												<p>うりの</p>											7	
<p>まだ若い北条時政が</p>												<p>隠れていた。</p>											8	
<p>まだ若い北条時政が</p>												<p>うりに</p>											8	
<p>まだ若い北条時政が</p>												<p>瓜の中に初めから蛇の卵が潜んでいてうりといつしよに育つたと</p>											9	
<p>まだ若い北条時政が</p>												<p>妖しい瓜</p>											11	
<p>まだ若い北条時政が</p>												<p>まだ若い北条時政が</p>											12	
<p>まだ若い北条時政が</p>												<p>まだ若い北条時政が</p>											12	

		13																																											
12	満願の夜に、岩屋の主の蛇が現われた。	13	女性の姿に見えた蛇は、人間のことで時政に未来のことを話した。	13	幻がさめた時、	14	立っているあたりに	15	少しもこわくはなく、頼もしく美しい伝説である。	16	いなか	16	ものすごい話	16	たくさんあつて、	16	気味の悪い	1	大きな隔たり	2	古い昔の	3	エデンの園のどの木の実を食べても	4	アダムとイヴのふたりは	5	守っていた時、	5	蛇が出てきて	5	禁断の木の实	6	蛇については、「神の	6	「神の造りたまひし野の生きものの中に蛇最もさかし。」	7	なんとも書いていない。	8	素盞鳴尊の退治したおろち	9	つりあいのとれた、小蛇の	10	大昔	10	ちがいない。
12	満願の夜に岩屋のぬしの蛇が現はれた。	13	女性の姿にみえた蛇は人間の言葉で時政に未来の事を話した。	13	まぼろしが覚めた時、	14	立つてゐた辺に	15	少しも怖くはなく、頼もしく美しい、古い伝説風でもある。	16	田舎	16	物すごい話	16	沢山あつて、	16	気味のわるい	1	大きなへだたり	2	古いむかしの	3	イデンの園のどの樹の実をたべても	4	アダムとイヴの二人は	5	守つてゐたとき、	5	蛇が出て来て	5	禁断の樹の实	6	蛇については「神の	6	「神の造りたまひし野の生物の中に蛇もつとも狡猾し。」	7	何とも書いていない。	8	素盞鳴の尊の退治した大蛇	9	つり合いのとれた小蛇の	10	大むかし	10	違ひない。

		14																																															
11	エデンの蛇は無形のもので、	12	木の实を	13	すばらしい、	16	十軒ぐらゐの農家とその辺に家を構えた。そのうちの主人が	1	そうとうの広さの	2	道路に沿うた	2	古いけやきとはんの木が	2	十年ぐらゐ経つて	3	私とふたりの子供だけ	3	引越すことの	4	いつまでも	4	へいぎわのけやきからけやきに伝わつて	5	片山さんとこの主らしい、そつとして	6	おけと	6	しかつて止めた。	6	門側のかきねで、住まいには	7	ある時それを見た。一本の木から隣	8	の木にはい伝わる姿は	8	大きなけやきに	9	刈りこみの時調べてみても	11	もちの木に一匹の小蛇が	11	これは多分主の子よと、	12	みんな決めて、そうつとさわらずに	12	おいた。	12	だれも
11	エデンの蛇は無形のもので、	12	樹の实を	13	素ばらしい、	16	十軒ぐらゐの農家とその辺に家を構へた。そのうちの主人が	1	相当のひろさの	2	道路に添うた	2	古い樺と榛の樹が	2	十年ぐらゐ経つて	3	私と二人の子供だけ	3	引越すことの	4	何時までも	4	塀ぎわの樺から樺に伝はつて	5	片山さんとこのヌらしい、そつとして	6	置いて	6	叱つて止めた。	6	門側の垣根で、住居には	7	或時それを見た、一本の樹から隣の	8	樹に這いつたはる姿は	8	大きな樺に	9	刈込みの時しらべて見ても	11	冬青の木に一びきの小蛇が	11	これはたぶんヌの子よと、	12	みんなできめて、そうつと触らずに置	12	いた。	12	誰も

		15	
14	14	16	16
13	13	15	15
13	13	15	13
13	13	15	13
13	13	15	13
12	12	15	13
11	11	15	13
11	11	15	13
10	10	15	13
9	9	15	13
7	7	15	13
6	6	15	13
5	5	15	13
5	5	15	13
4	4	15	13
3	3	15	13
2	2	15	13
16	16	15	13
16	16	15	13
15	15	15	13
15	15	15	13
13	13	15	13

- ### 五 大意・文章構成
- 1 大意
- 日本では蛇の昔話がたくさんあるが、アイルランドの伝説にも蛇が多く登場する。アイルランドと日本における蛇をとりあげ、その共通点を指摘する。一般的には人間にとって蛇は邪悪な存在であり、によるよるとしていて気持ちのいいものではない。
- 筆者の家に主と思われる大蛇、そしてその子とも思われる小蛇・中蛇が現われた話題へと移っていく。その主の蛇はわが家の消長の姿を教えに来る存在であり、広子に気味悪さを感じさせない、恋しく思わせるものであるとしている。
- #### 2 文章構成
- 前段 遠い国の蛇や古い蛇の話
- 第一段落 歴史の表舞台に立った蛇
- A アイルランドの蛇の伝説
- (1) セントパトリックと蛇に関するアイルランドの伝説 【九①—一〇⑭】<sup>14</sup>
- B 日本の蛇の昔話
- (2) 素盞鳴尊の八岐のおろち退治 【一〇⑮—一一③】
- (3) 倭迹迹姫と大物主神との伝説 【一一④—一一⑥】
- (4) 上野の勇将田道が大蛇になって蝦夷を悩ました伝説 【一一⑦—一二①】
- (5) 藤原道長とうりの中の蛇の話 【一二②—一二⑪】
- (6) 北条時政と女性姿の蛇 【一二⑫—一二⑮】
- 第二段落 気味の悪い存在である蛇
- C 人間にとつての蛇<sup>15</sup>
- (7) いなかに伝わる話の蛇と昔の蛇 【一二⑯—一三②】
- (8) エデンの園の蛇 【一三③—一三⑭】
- 後段 身近な蛇の話

第三段落 広子の家に住む蛇の話

D 広子の家の蛇

- (9) 広子の住んだ大森の家にいた大蛇の話【一三⑮—一四③】
- (10) 大森の家の芝生に現われた中蛇の話【一四④—一五⑧】
- (11) 大森の家の蛇についての回想と感想【一五⑨—一五⑭】

文章の構成についてはダイナミックにとらえさせたいところである。「遠い国の蛇や、古い古い蛇はさておき、私の家の蛇を思い出す」と前段を受ける箇所さえ確認できれば、大きく二つに分かれることに学習者は容易に気づくはずである。東西の蛇の伝説・説話と筆者の家にいた蛇の話の大きく二つに分けることができずである。

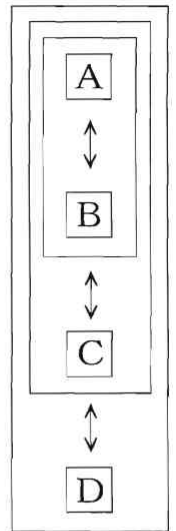
加えて、筆者は、前段、後段どちらの蛇の話を中心に述べようとしているのかを学習者に考えさせたい。この文章は、後段の広子の家の蛇についての追懐から始まったものであると考えることができるであろう。広子の家の蛇も我が家の消長を知らせる主であると考ええる点で、前段と同様に霊力ある蛇としてとらえていくことがうかがえる。

さらに、遠い国の話から身近な話へ、昔の話から最近の話へ、文献等からの伝聞から実体験へと、文章が流れていることも理解できるところである。

また、前段において、蛇は一般的に人間にとって邪悪で気味が悪く気持ちのいい存在ではないとするのに対し、後段においては、広子が「不思議に私はその蛇に少しも気味悪さも感じない。むしろ恋しいくらい」に感じるというように蛇に対する印象が対照的に描かれている点も効果的である。

前段のみに注目すれば、AとBにおいてはアイルランドと日本の話題についての対比がうかがえる部分であるし、第一段落と第二段落においては、蛇はそれにとつての「蛇族の英雄」と、人間にとつての「邪悪で気味の悪い」存在という対比も確認できる。

以上のことを整理し、A、B、C、Dの各節の関係を図示すれば、左記の通りとなる。



学習者は、これらのことを確認することによって、実際に文章を執筆する際の文章構成の一つの方法を学ぶことができるはずである。この文章を学習することを通して、学習者自身も日常生活の中に生起する身辺的なものを自らの手で書き表す際の一つの型を習得することが可能であろう。

※ 本稿は、引用に際し、適宜旧字を新字に改めた。また、ルビについても省略した部分がある。

1 大藤時彦「柳田先生と国語教育」『教室の窓』第十一卷第十号 東京教育研究所 昭和三十七年（一九六二）十月 七頁

2 教材としての「浅春随筆」について考察を試みたことがある。本稿と合わせてご参照いただければ幸いである。「教材「浅春随筆」考」『釧路論集』第三十九号 北海道教育大学釧路校 平成十九年（二〇〇七）十一月 一—一三頁

3 柳田国男編『新編国語 総合編一』（東京書籍 昭和三十三年（一九五八）四月三十日文部省検定済 A1003）。尚、この改訂により、柳田は国語科教科書づくりから手を引くこととなる。「大蛇・小蛇」は単元「一随筆」に所収されている。配列は次の通りである。

一 随筆

- 一 浅春随筆（柄内吉彦）
- 二 大蛇・小蛇（片山広子）
- 三 紙（幸田文）
- 四 ろくをさばく（三淵忠彦）

「解題」(片山廣子／松村みね子『燈火節』月曜社 平成十六年(二〇〇四)七二八頁)によれば、「大蛇・小蛇」は改訂教科書に所収されていることは触れているが、柳田監修国語教科書に所収されていることについては触れていない。

4 九頁頭注

5 「国語」研究会『「国語」指導の研究 高等学校一年 全』(東京書籍 昭和三十三年(一九五七) 九頁)

6 筆者・片山廣子については、拙稿「片山廣子『燈火節』をめぐって」(北海道教育大学紀要(教育科学編)第五十八巻第二号 平成二十年(二〇〇八)二月一―一六頁)において詳細に論じている。ご参照いただければ幸いである。

7 一五頁頭注

8 九頁

9 片山廣子／松村みね子『燈火節』月曜社 平成十六年(二〇〇四)十一月

10 注6 九―一〇頁

11 七三―八一頁

12 『燈火節』には、四十七編の随筆と短歌「林檎のうた」十首の全四十八編が収載されている。

13 「解題」(注9 七二八頁)

14 【一】内の漢数字は教科書本文の頁、丸数字は行を示すものである。以下同様。

15 注5によれば、「節意」の項において、(7)は「昔の蛇は蛇族の中の英雄であったこと」(九頁)とまとめられている。ここでは蛇が「英雄であったこと」【一三②】よりも「邪悪な気味の悪い」【一二⑩】存在であることを述べていると考

える。続く(8)に、聖書を引用し、イヴと蛇との対話について広子は「気持ちよくそんなものと話したというのが不思議である」【一三⑩】としている。一般的に、蛇は人間にとって気持ちのいい存在ではないとするのである。稿者はこの(7)と(8)が前段のまとめにあたりと考えるのである。前段を受けて、広子の家に現れた蛇については「不思議に少しの気味悪さも感じない。むしろ恋しい」【一五⑬】とする広子の思いが前段の蛇とは対照的に浮かび上がってくるのである。

【資料】

二大蛇・小蛇

片山廣子

日本では蛇の昔話がたくさんあるが、\*アイランドの伝説にも蛇が多いようである。同じように島国のせいかもしれない。はじめに私が読んだのはごく太古のこと、北方の山の湖水に劫を経て大蛇が、将来偉い人がこの国に来て蛇族全部を退治しようという予言を聞いたので、そういう災禍の来ない前に海に逃げてしまおうと思って、一生懸命に湖水から逃げ道を作りはじめる。行く道々で沿岸の家畜どもを食い荒し、時々休息し、そうしてまた水路を掘る。勇ましい人間どもが大蛇を攻撃してくるが、いつも人間の方が負けてしまう。しかし大蛇も負傷したり殺されかかったりして、長い月日を経てようやく海まで水路を通す。大蛇の作った道がシヤノン川になったという話である。

その偉い人というのは、セント・パトリックのことだそうである。さてセント・パトリックの伝説には、この聖者はローマの奴隷として少年の日を過ごしたアイランドを愛する心深く、自由の身となって後、再びアイランドに渡ってキリストの道を伝えたということである。キリスト紀元五世紀ごろのこと、彼に囲まれた島国は森と山と野原と沼ばかりで住む人は少なく、いたる

二大蛇・小蛇

九

一 隨筆・隨想

ところ蛇かきばつて、大きい蛇・小さい蛇・中蛇・おろちの類までこの園をすみかにしていた。聖者がひとりりの弟子とともに、いろいろな困難と戦いながら休息なく西に東に伝道してゐる時のこと、ある山陰の狭い道を通りかかると、道に蛇が寝ていて、珍しくもないので弟子はまたいで通った。蛇はたちまちおどろきかたてて弟子を食い殺してしまつた。聖者は、聖者といへども人間だから、この時までうっかり歩いてゐたのだから、だいな弟子を腹前に食われて、大いに怒つて、「けしからん蛇のやつ。下がれ、下がれ。なんじのともがら、永久に消滅せよ。」としかりつけた。その殺人蛇はその時急いでするすると消えてしまつたが、あらゆる蛇どもがこの時をきっかけにだんだんどこかに移転していったらしく、アイルランドはいつのまにか蛇の島ではなくなつた。ひろく聖者の伝道のおかげでもあつたらう。(キリスト教と蛇とは仲がよくない。)ドラゴンを踏まえてゐるのはイギリスのセント・ジョージで、アイルランドのセント・パトリックでないことは間違ひないけれど、大昔はこの園でも蛇が人間の敵であつたとみえる。

後世になつてアイルランドの伝説には蛇でなくフェアリーが出てくるようになり、お話は大んだん殺伐でなくなつた。人間もふえて強くなつたのであつたらう。

わが国の蛇の話も、はじめの方の大きい、素戔嗚尊が奇稲田姫を八咫のおろちから救つた話はどこの園にもありそうな伝説である。そのおろちは頭と尾が各八つあり、背中には松やかしわがはえて、からだ全体の長さが八丘八谷にはいわたつたというから、そうとうの長さであつたと思われ。ほんとうにそんな大きいものならば、奇稲田姫のおとうさんの家などには入りこむことはできなかつたらう。それが伝説なのである。

崇神天皇の御代、倭迹迹迹姫の夫となつた大物主神はある時姫のくし箱の中に隠れた。明け方に姫がくし箱をあけてみると、にしき色に光る小さい蛇がいたという。これはすぐれて聰明な人間の娘と神との間の悲劇で、日本書紀も姫に同情してゐるようによつて読まれる。

仁徳天皇の御代、北方の蝦夷らがそむいた時、上野の勇将田道を大将として征伐させたが、その時の蝦夷はひどく強、田道は石巻の港で戦死してしまつた。田道の家が主人の手紙を取つて田道の妻に持つてゆくと、妻はその形身を胸に抱いて自殺し、この夫妻の死は広く世間から惜しまれ、手厚く葬られた。その後しばらくたつてまた蝦夷が攻めこんできて田道の墓を掘り返した。すると墓から大蛇が出てきて大勢の敵を食い殺した。食われなかつたやつらもみんな蛇の毒気にあつて死んだ。石巻の町にはいるすぐ手前の畑に今でも「蛇田」という名所がある。「……五十八年の夏五月、荒陵の松林の南の道にあたりて、たちまち二本のくぬぎ生ひ、道をはさみて未合ひたりき」と本に書いてある。それは田道が死んでから三年めのことであつたが、昭和の御代のある年、私は仙台にいた娘を尋ねて、松島から石巻に遊びに行った時、蛇田の中ほどに今でも一むらの松林があつて、田道の墓がそこにあるのを見た。これは大

●倭迹迹迹姫―素戔嗚尊の妻  
●大物主神―大己貴神、大國主神ともいう。  
●日本書紀―三卷、崇神天皇二十二年、倭迹迹迹姫の事、七二〇年に成つた。神代から持統天皇に至るまでの神代史の歴史。  
●蝦夷―古く東北地方に住んでゐた一國衆。  
●石巻―高城石巻市、高城石巻市に属す。  
●蛇田―現在、石巻市に在り。  
●五十八年―仁徳天皇の五十八年。  
●荒陵―新巻の山。  
●二本―日本書紀。

二 大蛇・小蛇

きい悪い蛇の話。

人間がだんだんふえて世の中がにぎやかになると、歴史の表に蛇は出なくなつたようだ。藤原道長が榮華の絶頂にいた時分のこと、大和の園からこぎげん何いとしてみごととなりてきた。夏の夕方で、道長は、「ほう、うまそうなりだな」とその進物のかごをながめていた。その時御前に安倍晴明と源頼光が出仕していたが、安倍晴明はまゆをひそめて、「殿、ただいまこのお座敷には妖気が満ちております。このかごのうりが怪しく思われます。」と目に見るように言つた。すると頼光がいきなり刀を抜いてそのうりをまっ二つに切つた。うりの中に小さい蛇が輪を巻いて隠れてゐた。これは殿を恨むものの思いが蛇となつてそのうりの中にもつてゐたのだという話であるけれど、加工品の中に蛇を隠しこむのは運つて、うりの中にはじめから蛇の卵が潜んでいてうりといふしよに育つたと考へてみれば、それはやっぱり陰陽師安倍晴明が言つたとおり怪しいうりであつたのだらう。これはごく小さい蛇。

まだ若い北条時政が江の島の岩屋に参籠した満願の夜に、岩屋の主の蛇が現れた。その時蛇体ではなく美しい女性の姿に見えた蛇は、人間のことは時政に未来のことを話した。幻がさめた時、その女性が立って来たあたり三片のうりが落ちて光つてゐたという話で、これは少しもこわくはなく、頼もしく美しい伝説である。

わが園のいなかに蛇のたりのものすこい話がたくさんあつて、それはみんな邪悪な気味の悪いものばかりで、歴史に出た表向きの蛇たちのさつそうとした行動とは大きな隔たりがある。古い昔の蛇たちは同じ蛇族の中の英雄であつたと思われ。

もつと世界的な話ではイヴが見た蛇。神はエデンの園のどの木の実を食べてもよろしいが、たつた一本だけ、その実を食べるべからずとおしやつた。アダムとイヴのふたりは正直にその命令を守つてゐた時、蛇が出てきてイヴを誘惑してその禁断の木の実を食べさせたのである。聖書にはその物語がこまごま述べてあるけれど、蛇については、「神の造りたまひし野の生きものの中に蛇最もさかし」とあるだけで、蛇の大きさはなんとも書いてない。常識で考へて素戔嗚尊の退治したおろちのようなものではなく、草原の上をすべり出て女と話をすることにしようどつりあいのとれた、小蛇のやや大きいのであつたかと思われ。しかし大小ともあれ、どんな大昔でも、蛇は今日と同じくよろしいにちがひない。女が気持よくそんなものと話をしたというのが不思議である。そうするとエデンの蛇は無形のもので、イヴの頭の中にだけ見えたのかも知れない。イヴはその頭の中の蛇といふような回答をして、木の実を食べる決心をしたと考へてみれば、かなりすばらしい、生意気な女であつたようであつた。それがわれわれ女性みんなの先祖であつた。

遠い園の蛇や、古い古い蛇はさきおき、私の家の蛇を思い出すと、今はもうかなりの過去になる。大森の家はずつと以前は畑であつて、十軒ぐらゐの農家がその辺に家を構へた。そのう

●藤原道長―実名は藤原隆家、大蔵大臣、世に榮華の絶頂に在り、御堂白河といふ。  
●安倍晴明―平安朝時代の陰陽師、天文博士。  
●源頼光―(?)  
●三つに切つた―鎮守府將軍源頼朝の子、田原天長親の四男に在り、嘗て藤原氏を助けた。  
●陰陽師―陰陽寮に属し、占ひのことなどをつかさどつた官。  
●北条時政―二長十二、北条初代の執權。  
●江の島―神奈川県鎌倉湾内に在る相模湾内の小島。  
●イヴ―エバの神の創造した女、旧約聖書創世記に見える。  
●エデンの園―人類の最初に在りたる所、旧約聖書創世記に見える。  
●アダム―エバの神の創造した男、旧約聖書創世記に見える。

二 大蛇・小蛇

